

## 「墮落」する女学生

——「女学生神話」を巡る考察（二）——

平石典子

はじめに

明治後期の日本において、「女学生」は「女子学生」という字義以上のものを人々に訴えかける存在であった。前稿<sup>1)</sup>では、文学作品におけるこの「女学生」を巡る言説がある方向へと収斂していく過程を追い、その結果明治三十四年頃確立したと思われる、「西洋風の美の象徴であり、何事にも積極的で性的にも奔放」な「女学生像」を「女学生神話」と名付けた。この「女学生神話」がその後どのような形に発展、或いは変質していったのかを考察するのが本稿の目的である。ここでは、小杉天外の『魔風戀風』を出発点として、女学生の「墮落」について考えてみたい。

### （一）「知性」と「墮落」——『魔風戀風』

74 明治四十一年、二年頃に出来た流行歌、「ハイカラ節」は、十七番までの歌詞がつけられていたが、その中の三番から八番に、女学生の姿が描かれている。

○ゴールド目鏡のハイカラは、都の西の目白台、ガールユニヴァーシティーのスクールガール、片手にパイロン、ゲーテの詩、口には唱へる自然主義、早稲田の稲穂がさらさら、魔風恋風そよ／＼と。

○しな／＼と出て来るは、都に名高き御茶の水、高等女学校のスチューデント、腰にはバンドの輝きて、右手に持つはテキストブック、左手にシルクアンブレラー、髪にはバターフライスホワイトリボン。(三、四番)

女学生を学校別にして、それぞれの特徴を描き出す、というのは当時流行したらしい。同じ頃、『女學世界』では「女學校評判記」の連載が始まり、女學校が「差別化」の時代に入ったことを伺わせる。そしてここにも明らかなのは、「左手にシルクアンブレラー、髪にはバターフライスホワイトリボン」というように、「女學生」という存在全体が、西洋的なものとセットで考えられていたことだが、今回注目したいのは、「魔風恋風そよ／＼」という部分である。明治三十年代は、女学生を扱った小説が新聞小説として人気を博していたわけだが、明治三六年二月、『読売新聞』紙上に登場したのが小杉天外の『魔風戀風』だった。明治四十年代に入ってから作られた「ハイカラ節」にも歌いこまれていたことから、この作品が実に絶大な人気を誇ったことがわかるだろう。『読売新聞』は、紅葉退社後は発行部数かなり減っていたが、この小説が評判となって注文が殺到、新聞を再刊する、というさわぎにまでなったという。

読売新聞社では、この小説で発行部数が五千部ふえることに、祝宴をひらき、この宴会を「五千会」と名づけて、営業部は氣勢をあげた。(中略)従って原稿料も四百字一枚で三円を支払った。

『初すがた』や『はやり唄』といった作品で、ゾライズムを追求する作家として文壇で評価をうけた天外は、この作でこれだけの原稿料を手にしてしまった。伊藤整をはじめとした多くが指摘するように、結果的には、こ

の作とその後彼に与えられた「人気作家」というレッテルが天外を通俗作家にしてしまったのである。新聞小説らしく、この作品の冒頭では、ヒロイン、萩原初野の類まれなる美しさが描き出される。

鈴の音高く、現れたのはすうりとした肩の滑り、デートン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流しにして、白リボン清く、着物は矢絣の風通、袖長ければ風に靡いて、色美しく品高き十八九の令嬢である。

これは梶田半古の挿絵と共によく引かれる一節であり、「おぼけ」とも呼ばれた結い流しの髪にリボン、矢絣の着物に海老茶袴、とは、実に現代の大学卒業式にまで受け継がれている「女学生スタイル」である。当時の言葉で「スースー」といわれた流行の最先端の少女たちが、実際には日本髪やおさげの方を好んだ、というようなことを記した資料も残されているが、新聞というマスメディアによって、「女学生スタイル」が人々のイメージの中で確立していったのは興味深い。そしてここでも、主人公の女学生は、自転車という西洋伝来の小道具と共に登場する。この自転車で転倒して骨折、入院するのが彼女の悲劇の始まりなのだが、颯爽とした彼女の姿は、最初から西洋風の美しさと積極性を読者に印象づける。

さて、美しく積極的な女学生ヒロイン、初野は親友の子爵令嬢、夏本芳江の許婚、東吾と恋に落ちるが、この恋は悲劇に終わることとなる。先にひいた「ハイカラ節」にも、この悲恋は「○魔風恋風そよ／＼と他処の軒端に咲匂ふ、主あるフラワーと知りながら、不図した事から深い中、今さら済まぬと思へども、思案の外とて是非もなく、忍び込んだる恋の闇。(十二番)」と歌われているが、美しく、懸命に真つ直ぐ生きようとす初野が、様々な不幸に見舞われる、というプロットが、この作の絶大な人気を生み出したのだろう。しかし、いま一度通読してみると、この作品が描き出しているのは、ヒロインが「女学生」淫奔」という言説に絡めとられていく姿だということがわかる。下宿住まいの女学生が、十九世紀のフランスで「女学生 (étudiante)」と呼ばれたミユツセやフローベールの小説のグリゼットたちと同様に、男たちにとって籠絡しやすい存在であり、段々とそのよう

な存在として目されるようになったことは前稿に述べたが、この小説では、佐伯順子が指摘するように、「墮落」という言葉が一つのキーワードとなつてゐるのである。女学生の「墮落」とは、無論勉学に身が入らなくなつて中途退学などをすることを指すのだが、この作品では使われ方もさまざままで、「墮落生」といつた普通の読みの中に、「墮落る女学生」「墮落い人」といつたようにも読まれている。そしていずれの場合にも、その原因は男性との性関係であることが暗に示唆されている。

小説の初めの部分から、初野のまわりは、女学生の性を巡るネガティブな小説で満ちてゐる。彼女の下宿は前年までは彼女の通う帝国女子学院の認可下宿であつたものの、「女学生の醜聞が世間に喧ましく」なつたために、認可を取り消されてしまう。当時の下宿屋は、基本的には政府の許可を得た「公認下宿」であつた。初野の下宿は、「男子の客は御断り申候」と看板に書き添えられているのだが、実際には、男女の別なく下宿させていた所が多かつたようである。また、下宿の需要が大きくなると、「素人下宿」と呼ばれる、無認可の下宿屋も多くなつた。こちらには、公認下宿よりも廉価で親切という評判が立ち、女学生も多かつたようだが、無認可故に姓名の届け出義務などもなく、よつて人目を避けるのによつてつけの下宿でもあつたらしい。また、初野の下宿屋のおかみ、島井もとも、「己が罪」の教師と同じような人物だ。彼女も殿井という金持ちの画家の頼みで初野との仲をとりもとうとし、殿井の家に二人で出かけて、やはり先にこっそり帰つてしまうのである。これでは、下宿住まいの女学生たちが「醜聞」に巻き込まれる機会が多くなるのもつともだろう。

初野に恋をする財産家の殿井も、当初は女学生に対して辛辣である。下宿のおかみに初野の下宿料が未払いであることをきくと、「男狂ひ」の「墮落生」だと評し、初野の部屋に忍び込んだ際、丸薬の壘を取り上げて「梅毒の薬」だと冗談を言う。他にも、「阿嬢様だらうが何だらうが、此の頃の女生徒なんざ」簡単に男の家に泊まつていくに違ひないと殿井の家の婆やは言つてゐるし、初野の異母兄は「女の書生なんざ、私生児でも生んで歸つて来るのが落だ」といつたのが口癖である。初野には、さらにひどい仕打ちも待つてゐる。親友の芳江の家を訪ねた際、彼女は芳江の父親の子爵に乱暴されそうになる。ところが、それを見咎めた子爵夫人は、夫ではなく、初

野を貢めるのである。

何故貴女は此室へ入りました？何の爲に入りました？今の様な、彼様な猥褻な事が為たさに入つたんですか？當今の女學生には、學資に窮して、よく醜業を爲る者が有ると云ふが、貴女は其様な人ぢや無からうね……

「性的に奔放」というのは、確かにこれまでも「女學生神話」の一端を担っていた。ところが、この作品では、女學生は単に奔放であるのみならず、金錢を目的に売春をする存在として語られるのである。芳江の頼みで東吾に会いに行く途中、脚気で倒れた彼女は、巡査に介抱されるが、巡査も「然るに、前後を考ふる暇は無いから知らんが、此様な暗い、草原に横臥し居つては、無宿の乞食か、左なくば、淫賣婦の類と認められても苦情は云へんでせう……」と初野を論ず。女學生は、新しい教育の中で西洋的な社交性を身に附けることとなり、その社交性からまずは芸妓と重ねられてまなざされた。それが、いつの間にかその性的奔放さの故に売春婦と重ねられるようになつてしまふのだ。彼女たちの存在は、ますますその「肉体」の比重を増すこととなる。

作者天外は、この作について「更に客観に徹した創作を試みんとして稿を起したものである。女主人公は當時一二の新聞に報道された、モルヒネ注射の量を誤つて死を招いた某苦學女學生をモデルにしたのであるが、他の人物といへども、實在の甲乙等の、生活と性格を實寫せんと企てたるものである。」と述べ、「実写」であることを強調している。そして、實際の女學生が既に性的な言説の直中に身をおく存在だったことは、「女學生の墮落」を論じた『理想の女學生』という書物からも読み取れる。この本は彼女たちの「墮落」の原因を探り、英・仏・米国の若い女性の生活との比較も取り入れながら問題点の改善を促したのだが、ここでも、女學生の「墮落」について次のように語られる。

日々の新聞に女学生の失態と云ふやうな記事が、つ位づ、ある、其の多くは男學生と私通して逃亡したことを、私生児を胎むだこと、中には役者を買ふものもあるとのことが大部分を占めて居るが、甚しきに至ると、女学生の売淫と云ふやうなものも少くはない。<sup>11</sup>

『魔風戀風』の初野は、まさにこのような言説の中に身を置いている。彼女には落ち度がなくても、周囲は彼女を「墮落」と結び付けようとする。作中には、東吾と恋を語る初野の幸せそうな姿は殆ど出てこない。そのかわりに我々の前に繰り返されるのは、「墮落」を期待する周囲の眼と、初野との戦いでなのである。

ここで注意したいのは、初野が「墮落」と戦っていることである。小説の冒頭から、彼女が「大變に英語の優る女」であることが噂され、初野は美しいだけでなく、優秀であることがわかる。初期の「女学生小説」において、女学生たちは知的な存在とは考えられておらず、知的であろうとすれば疎まれるだけだった。『魔風戀風』は、ヒロインである女学生に初めて「知性」が与えられた小説だということもできるだろう。そして、「墮落」から彼女を守っているものも、彼女の「知性」精神に他ならない。学校を出て経済的にも自立した生活を送ることが初野の夢であり、彼女はその夢を目前にしている。学資を打ち切られることがわかつていながら妹を庇って異母兄に啖呵を切るのも、兄の言い分を理不尽と感じる彼女の知性の表象であり、もうすぐ自立できるという自信のあらわれだといえる。また、殿井との関係をみても、初野がその知性によって「己が罪」の環の轍を踏むことを免れていることがわかる。無論、初野の場合には東吾という恋愛対象がいることが殿井を拒む一番の原因なのだが、ここでも自立までもう少し、ということが彼女の励みとなっているのである。

しかし、結局のところ、初野はこの戦いのために経済的苦境に追い込まれ、病氣となる。そんな彼女に、ネガティブな言説は追撃ちをかける。芳江のフィアンセの東吾に恋したことは、彼女の苦勞の一因である妹にも語られる。その際、妹の波子は、「私生児でも産んで、一生日蝕者に成ツ了」<sup>12</sup>う、という、異母兄の言葉をそっくり初野に投げつける。一旦は養家と離縁して退学し、初野との恋を全うしようと考えた東吾は、養家に頭を下げて

頼まれ、初野の方を捨てる決心を固める。なんとか「墮落」から身を守っていた初野は、心身共に疲れ果て、自立も、恋も、妹もなくして、脚氣衝心で死んでいくことになる。「知性」の完敗である。

(二) 引き裂かれる頭と身体……墮落女学生の行方

さて、「魔風恋風」のヒロイン萩原初野は、彼女を巡る「墮落」の言説に抗いながら死んでいったが、ここで、別の角度から女学生の「墮落」を描いた二つの作品を検証してみたい。

まず一つは、「魔風恋風」が『読売新聞』に連載されている六月に、『太陽』に発表された島崎藤村の「老嬢」である。ここで藤村は、高等教育を受け、やはり初野のように社会で自立しようとする女性を主人公に据えている。冒頭、女学校の旅行の引率で田沢温泉にやってきた沢関子は、学校時代の友人の瓜生夏子と再会する。

「噫。私は学問なぞをしなけりやよかつた——新しい智慧の味さへ知らなかつたなら、母の言ふなりにどんな男でも夫に持つて、一生満足して居られたらうものを。私は教育なぞを享けなけりやよかつた——精神を自由なものとさへ知らなかつたなら、斯うして籠を出て飛んで見ようとは思はなかつたらうものを。なにも、貴方、母や姉の世話にさへならなけりや、其でい、ぢや有ませんか。何故、世の中は斯う思ふやうにならないんでせう。何故、独身で居る女は片輪(13)なんでせう。何故、わたしたちは斯う他(14)から軽蔑されるんでせう。」

このような夏子の言葉からは、「藪の鶯」や「細君」のように、知的であろうとするが故に疎まれる存在としての女性像が見える。藤村は、明治二十六年に『文学界』に発表した「なりひさ(12)」において既に、「あ、学問をした我身一つがうらめしい。世の中に誰が哀しい、わしが哀しい。勿躰ないことながら、学問は身をあやまる。」

と美術学校で学んだ少女に語らせていた。そして、「なりひさご」のお歌が、「学問すればするほどに、身の不幸ながましてくる」と泣いていたのに対し、十年後に現れた夏子は、自分は思想も、嗜好も、道徳すらも世間の女とは違うのだ、結婚などはしないが「事業」をして生きるのだ、と関子に宣言するのである。結婚を控えた関子に向かつて「…お互に試して見やうぢや有ませんか——結婚した貴方の方が幸福か、独身で居る私の方が幸福か」と言い放つ夏子は、知的存在であるために、結婚して「良妻賢母」になることを拒否する。「魔風戀風」でも決して両立することのなかった女性の「知性」と「肉体的性」は、夏子においても分離し、彼女は「肉体的性」を排除しようとするのである。

ところが、この後作者によつて語られるのは、夏子の「肉体的な側面である。彼女は、女学校を卒業してから、「十年以来、情人を持たないといふ月日は殆ど無かつた」女性であるとされる。恋人の画家を袖にした彼女は、「学問した女の一番悪い手本」として人々の口の端にのぼるようになり、「わざ／＼軽薄な男を情夫に持つて、しかも幾人か捨てた」というような噂が広まるのである。その挙句、三十五の年に、とうとう夏子は「愛して出来た塊ではない」私生児を出産する。そして、その赤ん坊が死ぬと、ショックで、気がふれてしまう。

夏子は最早昔の夏子では無い。老嬢のなれの果と唄はれて、日毎に狂ひ歩き、菊の花かんざしにさし、白いもの顔にぬりくり、口唇に紅つけて、きのふは八日堂の薬師、けふは大宮の神社、百姓の袂に縫り、繭買の手に執付き、「女房にする気はないか」と、通る旅人を捕へて、顔に袖を当て乍ら恥しきうに笑ひました。

この夏子の末路は、まさに『魔風戀風』に登場した、「墮落」女学生の風聞と一致したものとなっている。故郷にも帰らず、結婚にも見向きもせず仕事に邁進することを自分に誓ったはずの夏子は、結局何の「事業」も成し遂げず、私生児を生み、発狂し、帰郷してからは手当たり次第の男に「結婚」を迫る。「女の書生なんざ、



私生児でも生んで歸つて来るのが落だ」という、初野の兄の言葉が、ここに実現したわけだ。知的な存在であるうとした夏子の頭と身体は引き裂かれ、お互いに認め合うことができない。知性と相反するものとしての肉体が出産とそれに続く子供の死を経験する時、彼女の「頭」に残されているのは、狂気という世界への逃避だけなのである。

この作品において、結婚・独身ということがあたかも二項対立であるかのように扱われ、こうした女性の人生に関する認識が「物語の周辺」として機能していることを指摘したのは金子明雄である。そして、「女学生」にとつての「物語の周辺」は頭（知性）・身体（肉体的性）という二項対立であつたといえるだろう。「老嬢」の発表当時、この作品が「人間の精神上の欲望と肉身上的の衝突と悲惨の末路」を描いたものであり、「若しも精神の自由を望めば、肉慾の為に苦しめられ、肉慾の煩悶を癒せば、精神の苦痛を感ず。老嬢は精神の独立自由を謀らむと欲して、却つて肉慾の為に射落されたり。」とした書評が出たが、精神上の欲望と肉身上的の欲望の衝突、とは明治日本において問題となるに至つた精神主義的な「恋愛」概念を想起させる。しかしながら、坪内逍遙が上、中、下と分類した恋においては、精神的な上の恋と肉体的な下の恋の間に優劣はあるものの、その二つが対立項として二者択一を迫るわけではなかつた。この評において「人間」とある場所に入るのは、実は「女性」、なかでもその「精神」と「肉体」が引き裂かれた存在である高等教育を受けた「女学生」なのである。

「なりひさこ」にも表れているように、女性の存在意義が良妻賢母となることだつた時代の、高等教育を受けた女性たちの混乱と失望を、藤村は感じ取つていた。彼は「女子と修養」というエッセイに、次のように記している。

学校時代には秀才といはれて、或は外国語が達者であるとか、又は音楽がよく出来るとか、絵画の嗜みが深いとか云はれたものも、家を持つやうになると、（中略）女は家事に逐はれて、自然と所帯の苦勞に疲れ、長い間学校生活をしたものも、初めからそれほど学問を修めなかつたものと、殆ど同じやうな無思想の

状態に陥るものが多いのである。<sup>18)</sup>

「秀才」が結婚すると「無思想」になつてしまふ、というのは「老嬢」の関子が辿る道である。「学校を出て後も、銘々自分が之れから更に修養期に入ると云ふ考へを、時も忘れずに持つ」べきだ、というのが藤村の主張だった。しかしながら、ここで彼が説く修養とは、「何処までも女が男を補助<sup>19)</sup>て」いく、主婦としての修養に他ならない。「男を補助」ようとした夏子の生き方は、やはり「墮落」女学生の行く末として造形されるしかなかったのだらう。「老嬢」は「水彩画家」などと共に、藤村の処女短編集「緑葉集」に収められているが、この短編集は「性の狂乱<sup>19)</sup>」をその根底に据えたものと考えられている。農村に暮らし、無学な場合の多い「緑葉集」の女性たちの中で、「老嬢」の夏子は異質な存在であり、藤村自身と重ねて論じられることもあるが、頭と身体が引き裂かれ、最終的には「墮落」という形でその肉体性のみが強調される女学生は、「性の狂乱」を図るにはうってつけの存在だったといえるだらう。「墮落」までをもその特徴となした「女学生神話」の肥大をこの作品に見ることは容易である。

### (三) 「悪女」の可能性

もう一つの例として、泉鏡花の作品を取り上げてみたい。鏡花は智識を鼻にかける虚栄をはった女性を嫌つたといわれ、女学生に対しては、生田長江が「私は女學生なるものを見ると、外國人だか日本人だか解らないやうな氣持がする、従て大嫌ひ、日本橋あたりで江戸式の若い娘を見ると、親類のような氣がするが、女學生に出会すと、他人のやうな感じがする。」<sup>20)</sup>という鏡花の言葉を紹介しているが、彼が明治三十七年に発表した「紅雪録」<sup>20)</sup>「續紅雪録」では、女学校で教育を受けた女性が主人公となっている。雪のために電車が動かず、名占屋で立ち往生する青年、深見千之助が、赤帽に第三者のふりをした身の上話を始める。すると、赤帽は、口を極めて

女学校出の女性を罵り始める。

「……」今時そんな優しい婦人（おんな）がありませんか、いづれ極昔風なお嬢様で、女学校などといふものは、門をお潜りなさつたこともないお人でございませうですな。」

ここで、赤帽はまず、女学生、或いは女学校出の女性は、優しさを持ちあわせていない、と非難する。千之助は「どうして東京で有名な学校出のぱり／＼だ」と反論するのだが、赤帽はまたじきに、「貴客（おきやく）、心がはりなら女学生でございませうが、何にも知らんのでは大した薄情な女といふではありませんんで、薄情な女でなければ、大方蝦茶袴は穿いた事のない人でございませう。」と繰り返す。赤帽がここまで女学生の非難をするのは、実は個人的な恨みによるものなのだが、彼が、自分が恨む女性の個人的な資質を憎むのではなく、「女学生」全体を罪深いものと捉えているところは、「女学生神話」の肥大と呼応しているといえるだろう。

あ、いふのは、何でも袴馴れた處から、腰を引括る紅いものは、禮服と心得て、惜氣もなく踏み出すんでございませう。何だつて貴下、婦人（おんな）の癖に、帯がなくつて歩行（あゆ）んだから、蝦茶を穿いた圖は、悪く見ると大道中を褲（は）ッでお練りも同然、肥つてこそ見えませうけれど、長襦袢一枚といふ姿だ、無法だらうぢやありませんか。

少女たちを窮屈な帯から解き放つた袴姿は、彼女たちを活動的にした。「紺暖簾」のお扇達が「口オンテニスを弄（も）」び、「魔風恋風」の初野が自転車に乗って登校するのは、とりもなおさず袴のおかげである。「紅雪録」でも、千之助は、姉と慕う婦人が「馬や自転車は知らないが、ぶらんこにも乗つたらう、荒き風處ぢやない、テニスの球に迄當つた人」だと述べている。しかしその一方で、帯からの解放は性の解放をも意味し、「女学生」墮

落」の図式はここでも健在である。

ところが、この小説において興味深いのは、「墮落」女学生のなれの果てとして「續紅雪録」に登場する、赤帽の仇、綾子の描写である。彼女は豪奢な別荘に住む役人の夫人となっており、「いづれ蝦茶を穿いたものと、直に分る」「なか／＼の學者」である。そして、彼女の「墮落」は確信犯的なものなのである。「淫婦」とも形容される綾子は、結婚後、夫にせがんで東京の女学校に通い、夫からのお金は浮気に使ったという女性として描かれている。その後彼女は地位のある役人と密通し、夫は狂死、その役人と再婚した、というわけだ。これは前稿で紹介した、親をだまして学資をせびり、情夫と共にこの金を使い果たした後は奉公しては金を盗むということが繰り返され、遂には金持ちの外妾となっていたのを御用となった、「莫連女学生」の新聞記事と共通するようだが、こうした例では、女性はむしろ進んで「墮落」する。綾子は、最後には、狂死した前夫の弟である赤帽に殺されてしまうのだが、このプロットからは、彼女に、明治初期に世間を沸かせた「鳥追お松」や「高橋お伝」のような「毒婦もの」の主人公と共通する点を見出すことも可能だろう。「鳥追阿松海上新話」、「夜嵐阿衣花廻仇夢」、「高橋阿伝夜刃譚」、「秋田奇聞姐妃の高髻」といった、明治十年代に新聞の続き物や絵草子として大変人気であった「毒婦もの」では、大抵の場合、美貌に恵まれた主人公は男性遍歴を繰り返し、殺人に至り、最後には自らも処刑や狂死といった非業の死を遂げる。綾子の場合には殺人を犯しているわけではないが、やはり不義密通の末に男を死に追いやり、自分も死ぬことになる。彼女は、新しい装いで明治三十年代に蘇った毒婦とも言えるかも知れない。

それでは、綾子の「新しい装い」とは何だったのだろうか。それは、「誘惑者」としての彼女の造形である。綾子は、千之助を家に招き入れ、さんざん思わせぶりなことをする。

女は何為恁うなんでせうね、貴下の其の冷いお手を、ちつと當てて下すつたら、どんなに清清するでせう、厭？お厭なら、撲つて頂戴、さあ撲つて頂戴な、撲たれると私嬉しいの。<sup>24</sup>

初対面の男に対してこのような台詞を吐く綾子は、男をからかうことで寂しさをまぎらわす悪女として描かれている。千之助はすっかり綾子に翻弄され、挙句に雪の中に放り出されてしまう。呆然とする千之助は、「長襦袢の肩微に圓く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寝ながら、うしろから洋燈を受けて、寶玉入の指輪の手に、一寸押へ、軽く斜にかざして、横文字の書を見て居た、枕頭の黒檀の置棚に、高脚の洋杯が一個、ベルモットの瓶が並べてある」という綾子の様子を目の当たりにする。

ここで注意しておきたいのは、女学校出の「なか／＼の學者」である故に「横文字の書」を読んでいる綾子が、このように西洋的な小物に彩られた形で描写されることだ。西洋風の美の体現者であった女学生は、「墮落」を経てやはり洋風の誘惑者となるのである。

男性を翻弄する「誘惑者」としての女性像は、十九世紀のヨーロッパ文学において数多く描かれた。その発展形である「宿命の女」は世紀末にもはやされ、世紀末的感受性を持つ男たちは、女性に翻弄される、という快感を文学の中で得ることとなる。そして、明治の日本にも、彼女たちの姿は紹介されていた。

「誘惑者」としての女性を明治三十年代に紹介した例としては、上田敏の翻訳美文集「みをつくし」の中に収められた、モーパッサンの「薪」の訳、「ゐろり火」が挙げられるだろう。主人公は、親友の妻に「本当の恋は不義の恋だ」と言い寄られる。

しばしありて、君はわれをおそろしと思ひ給ふかと問ひけるに、否と答ふるとき、頭をわが胸におろして、うつむきたるまゝ、われいひよらば何とし給ふと、口きくひまもあらばこそ、頸に腕を巻きて、早くもわが頭を近づけ、ふたりの唇は一となりぬ。

主人公は「この狂ほしく心くねりたるたはれめ」を疎ましく思いながらもその誘惑に負けそうになり、暖炉か

ら飛び出た薪に救われる。鏡花が明治四十一年の談話「ロマンチックと自然主義」の中でモーパッサンを誉めているのはよく知られているが、彼は「みをつくし」中のモーパッサンにも果たして目を留めただろうか。ともあれ、鏡花は「墮落」女学生の行く末として、男を誘惑し、翻弄する姿を描き出したのである。

鏡花は明治四十一年には「星女郎」という作品も残している。人里離れた峠の軒家に住む美しい女性が通る男たちの命を奪う、という筋から、この作品は「高野聖」との関連を指摘されることが多いのだが、「星女郎」ではこの起りは女学生の「多情」ぶりである。情人たちが胸の中で喧嘩をして激しい痙攣を起こす、という奇病に罹った彼女は、女学校の友人お綾が胸の中の男たちを切り殺すことによつて救われるが、今度はお綾が呪われる。血まみれの男の絵を描かずにはいられないお綾の肌には赤い痣が出来、絵にされた男は皆死んでしまうのである。多情という「墮落」をした女学生が男を殺す存在となる、というこの作品は、「紅雪録」「續紅雪録」の変奏だということもできるだろう。

最後に、もう一度「老嬢」に戻ってみたい。「老嬢」の夏子は、綾子のように「毒婦もの」の系譜に入るような人物として造形されているわけではない。しかし、男を翻弄する誘惑者、という観点から読み直してみると、夏子の言動も一風変わっていることがわかる。彼女は、男性を信じない、「香を嗅いで了へば、花を捨てる女」である。

愛せずには一日も居られない程の情熱と、絶えず情人を批評したり解剖したりする程の冷酷と——その矛盾を一つの胸に集めて居るのです。どうしてこの女が苦まずに恋するやうな、そんな訳もないことで承知しませう。ですから男に物を思はせて、もう／＼拝むばかりに煩悶させて、烈しく苦むさまを見て居乍ら、それで言ひたいことを言はせない。自分も亦、決して胸の秘密を打開けない——

夏子は露骨な「誘惑者」として立ち現れるわけではないが、「男に物を思はせて」「拝むばかりに煩悶させて」

苦しませることを喜ぶのである。彼女は三上という若い画家と交際している。三上の方は夏子に夢中で、彼女も三上を愛しているようなのだが、夏子は「私は貴方を愛して居りません。」と言い捨てる。藤村はこの物語で、「愛し愛せられたりせずに、活きて居られるものではない」女が不自然な人生を歩もうとすることに悲劇を見出し、いるのだが、そんな夏子に恋をする青年が、「拝むやうな目付き」をしながら「貴方はいつまでも私を弟と思つて下さるでせうか。」などと言いつつ出るところが面白い。この交際の主導権を握っているのは、あくまでも夏子で、別れを宣告された三上は、「黙つて首を垂れて居」るだけである。彼女もまた、男を翻弄する女性なのである。

肥大した「女学生神話」によつて頭と身体を引き裂かれた「墮落」女学生たちは、結局は単に肉体的な存在として語られ、悲劇的な末路を用意されてきた。しかし、「男を翻弄する悪女」という女性像が生み出されるに至つて、彼女たちは十分に肉体的な存在でありながら、何かしら知的な風貌を取りつつある。頭と身体は、それが健全な形であるか否かは別として、再結合を可能ならしめる方向を発見したのである。「老嬢」や「紅雪録」ではまだその片鱗しか見せていなかったり、不完全だったたりするこの女性像は、この時点では異端児としての扱いしか受けていない。しかし、明治四十年代により艶やかなヒロインとして続々と登場することになる彼女たちは、「墮落」する女学生の一つの可能性として示されたプロトタイプなのである。

(1) 平石「女学生神話」の誕生を巡つて」『人文論叢』第十八号、三重大学人文学部文化学科、二〇〇一年、三三―五十頁

(2) 大竹紫葉編「明治年間流行唄」、高野辰之、大竹紫葉編「俚謡集拾遺」附録、六合館、大正四年、九十一―九二頁

(3) 高木健夫「新聞小説史 明治篇」国書刊行会、昭和四九年、三六一頁

(4) 小杉天外「魔風戀風」『明治大正文学全集』第十六卷、春陽堂、昭和四年、二頁

(5) 曙女史「最近十五年間に於ける東京女学生風俗の變遷」『女學世界』第九卷第十四号、明治四二年、一二三頁、「スー・スー」とは「粹の粹」の意味で使われていたらしい。

- (6) 佐伯順子「色」と「愛」の比較文化史、岩波書店、一九九八年、一六一―一六四頁
- (7) 腰弁先生「女学生問題と素人下宿」、『中央公論』明治三十五年十二月号、七四―七七頁
- (8) 『魔風戀風』一一九頁
- (9) 同右、二二二頁
- (10) 小杉天外「解題」『明治大正文学全集』第十六卷、六三八頁
- (11) 正岡芸陽「理想の女学生」、岡島書店、明治三六年、十五頁
- (12) 『魔風戀風』二四六頁
- (13) 『島崎藤村全集』第二卷、築摩書房、昭和五六年、二四〇頁
- (14) 『藤村全集』第十六卷、筑摩書房、昭和四二年、二二二頁
- (15) 『藤村全集』第二卷、二五五頁
- (16) 金子明雄「老嬢」と明治三十年代における性欲のモチーフ——島崎藤村の小説表現(四)、『研究紀要』第六一  
号、日本大学文学部人文科学研究所、二〇〇一年、三九―五〇頁
- (17) 『紛々録』『早稲田文学』明治三六年六月号
- (18) 島崎藤村「女子と修養」(「新片町より」所収)、『島崎藤村全集』第十卷、筑摩書房、昭和五六年、四四頁
- (19) 三好行雄「解説」『藤村全集』第二卷、三五〇頁
- (20) 生田長江「泉鏡花氏の小説を論ず」『生田長江全集』第一卷、大東出版社、昭和一二年、二四五頁
- (21) 『紅雪録』『鏡花全集』第八卷、岩波書店、一九四〇年、六六六頁
- (22) 同右、六七〇頁
- (23) 同右、六八六頁
- (24) 同右、六八八頁
- (25) 『定本上田敏全集』第二卷、教育出版センター、一九八五年、六三頁
- (26) 『島崎藤村全集』第二卷、二四四頁